

平成 30 年度 企画展

沖縄県の

水中遺跡・ 沿岸遺跡



表紙 吉野海岸沖海底遺跡(宮古島市)

2018 年

10月 23日 (火) → 11月 25日 (日)

沖縄県立埋蔵文化財センター

目 次

ごあいさつ	1
遺跡の位置・種類	2
第1章 港湾遺跡	4
第2章 大交易時代の海難事故遺跡	6
第3章 異国船の時代	8
第4章 王国内の海域ネットワーク	10
第5章 米駆逐艦エモンズ	14
第6章 潮間帯遺跡	16
第7章 生産遺跡	17
おわりに	18
主な展示資料・参考文献	20

凡例

1. 本図録は、企画展「沖縄県の水中遺跡・沿岸遺跡」（開催期間：平成30年10月23日～11月25日）の展示を補完するものとして編集・作成しました。
2. 企画及び執筆・編集は片桐千亜紀・新垣力・久高健が行いました。
3. 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、本文に特に禁止の記載がないものについては、著作権（発行）者の承諾を得ずとも、本図録を複製して利用できます。ただし、利用にあたっては出典を明記して下さい。
4. 調査報告書に記載されている資料名と本図録に記載されている資料名や遺跡評価が異なるものが存在する場合があります。これは報告書刊行後の研究によって新たな評価がなされたことによるものです。

ごあいさつ

沖縄県は、東西約1,000km、南北約400kmに及ぶ広大な海域に散在する大小の島々から成り立ち、その亜熱帯・海洋性気候は一年を通じて温暖で、サンゴ礁の発達した海は豊かであり、先史時代から人々の生業の場でありました。また、グスク時代から始まる他国との交易は、琉球王朝時代には、中国、朝鮮から遠く東南アジアまで広がり、海を媒介とした交易で繁栄したことは県民の誇りとなっていきます。

水中遺跡や沿岸遺跡は、本県の地理的及び歴史的な特性を端的に示すものであるとともに、古くから海に育まれた沖縄の歴史を理解するうえでも欠かせない文化財であります。

一方、本県ではリゾート開発や大規模な埋立て、護岸工事等により砂丘や干潟などの地形喪失が進んでおり、沿岸地域の遺跡保存が課題となっています。

このような状況において、沖縄県立埋蔵文化財センターでは、平成16、17年度及び平成19～21年度の5カ年間、文化庁の補助を受けて「沿岸地域遺跡分布調査事業」を実施しました。

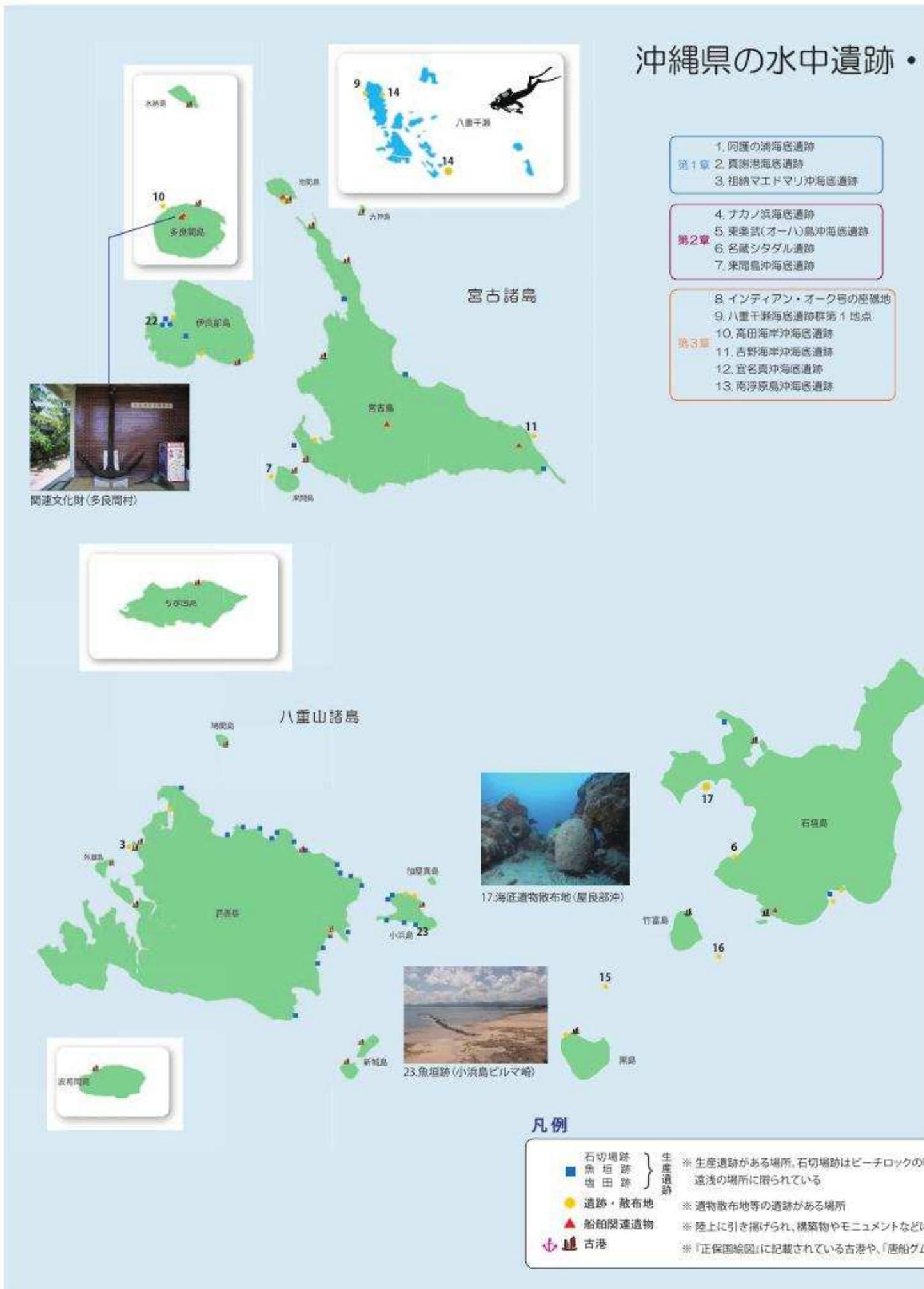
この調査では、沈没船9カ所・遺物散布地11カ所・港湾遺跡30カ所・生産遺跡76カ所など、県内全域で143カ所の水中遺跡及び沿岸遺跡が確認されています。

本展は、これらの遺跡から出土した資料等の展示を行うものであります。多くの方々にご覧いただき、海に育まれた本県の歴史・文化への理解を深めていただくとともに、水中遺跡及び沿岸遺跡の重要性を広く認識いただき、その保護にご協力いただけすると幸いります。

平成30年10月23日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　登川安政

沖縄県の水中遺跡・



・沿岸遺跡の位置

(数字は本企画展で紹介する遺跡)



海岸遺物散布地(国頭村奥川河口)

- 14.八重干瀬海底遺跡群第2・3地点
15.石西礁湖海底遺跡群第3地点
16.石西礁湖海底遺跡群第1地点
17.堅良部沖海底遺跡

第5章 18.米駆逐艦エモンズ

第6章 19.南恩納北船高海岸遺物散布地
20.瀬良追ギナン原遺跡

- 21.瀬川ヤガンナ島の塩田跡
22.下地島の魚垣跡
第7章 23.ビルマ島の魚垣跡
24.北原の石切場跡
25.真栄田の石切場跡



19.港間帯遺跡
(恩納村教育委員会提供)



18.沈没船:エモンズ(古宇利島)



21.塩田跡(今帰仁村溝川)

沖縄本島



1.港湾遺跡(座間味島向瀬の浦)



周辺離島



24.北原の石切場(久米島)



クの精製される場所に集中し、塩田跡・魚垣跡は

などに転用されている船舶関連の遺物がある場所

船グムイ等と呼ばれる伝承がある場所

第1章 港湾遺跡

その海域が港として利用されていたことを示す遺跡です。船舶の停泊具である碇（錨）や様々な時代の遺物散布が確認されます。港に停泊していた船舶が台風等の海難事故に遭遇した結果、沈没して遺跡として形成されるケースもあります。文献等に記録が残っていなくとも、遺跡の状況によって、その海域が利用されていた事を知る事ができます。

座間味島阿護の浦は、進貢貿易に関係する港として知られており、海底には15世紀代の中国産青磁から近世・近代の沖縄産陶器まで様々な遺物が確認されます。久米島真謝港も同じく進貢貿易に関わる港として有名であり、近くには蔵元が存在し、集落からは中国製の碇石が発見されています。海岸には中世から近世・近代に至る多種多様な遺物が散布しています。碇石は貿易船の存在を、示すと共に、多種多様な遺物は港として利用されていたことを裏付けています。西表島の祖納集落前面の海も港として重要だったと考えられます。17世紀に描かれた正保国絵図には、この海が港として利用されていた事が記載されていますが、実際、海底には15世紀頃から近世・近代に至るまでの遺物が散布しており、15世紀にはすでに港として利用されていた可能性が高い事が遺物である考古学的証拠からも推測されます。



▲阿護の浦海底遺跡（座間味村座間味島）

進貢貿易では風待ちの港として利用されており、「トウシングムイ（唐船小堀）」と呼ばれています。



▲出土遺物（阿護の浦）

海底には15世紀頃の中国産陶磁器から沖縄産陶器まで多時期多様な遺物が散布しており、港湾遺跡としての特徴を表しています。



◀『奉使琉球図』山島避風（慶良間内海に風を避けて停泊）
(沖縄県立博物館 1989 より転載)



▲真謝港海底遺跡（久米島町）

進貢貿易では中国へ向かう最後の寄港地として利用されていました。



▲海岸に散布する中国産陶磁器（真謝港海底遺跡）

12世紀後半頃の中国産陶磁器。14世紀に進貢貿易で利用される以前からこの海域が港として利用されていた可能性がある事がわかりました。このような遺物の発見から、文献等には記載されていない歴史を掘り起こす可能性が生まれます。



◀海底に散布する中国産陶磁器

（祖納マエドマリ沖海底遺跡）

15世紀から継続的に港として利用されていた事がわかります。



◀正保國繪図に描かれた祖納マエドマリ

（竹富町西表島）

港として利用されていた事が記載されており、遺物の散布によってその実態を明らかにできます。

（沖縄県教委 1992 より転載）

第2章 大交易時代の海難事故遺跡

琉球王国時代、外洋航海が可能な巨大な貿易船を駆使し、港から港へと中継貿易によって全盛期を迎えるました。その海域ネットワークは中国を核とし、北は日本、韓国、南は東南アジアの国々まで及んでいます。王国内の島々にはどんな小島であろうとも海外から輸入した陶磁器があふれています。しかし、その陰には陶磁器等を運搬する貿易船が台風等による海難事故に遭遇し、目的地にたどり着く事なく海底に沈没した無数の船もあった事でしょう。沈没を免れるために、積荷を泣く泣く海底に投棄した事もあったはずです。海底には、その船や積荷の残骸が遺跡として残されています。

久米島のハテノ浜は、貿易船にとっては危険な暗礁海域でした。それを示すように、この海域には、ナカノ浜海底遺跡と東奥武島沖海底遺跡（オーハ島）があります。前者は12世紀後半～13世紀前半、後者は15世紀頃の海難事故遺跡です。宮古島市の来間島には16世紀前半と考えられる来間島沖海底遺跡があり、石垣島では15世紀頃と考えられる名蔵シタダル遺跡が有名です。どちらの遺跡も古地図に描かれた船の航路付近に位置しており、頻繁な航行があった事がうかがえます。



▲来間島沖海底遺跡（宮古島市）



▲海岸に散布する中国産陶磁器（名蔵シタダル遺跡）



◀海底に散布する中国産陶磁器（来間島沖海底遺跡）



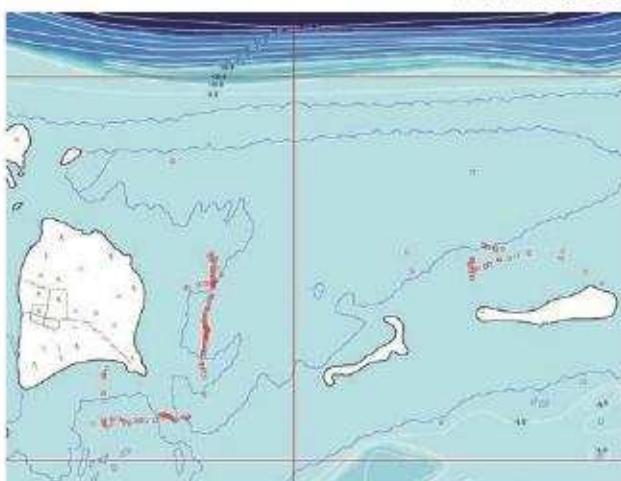
▲遺物の写真撮影 (東奥武島沖海底遺跡)



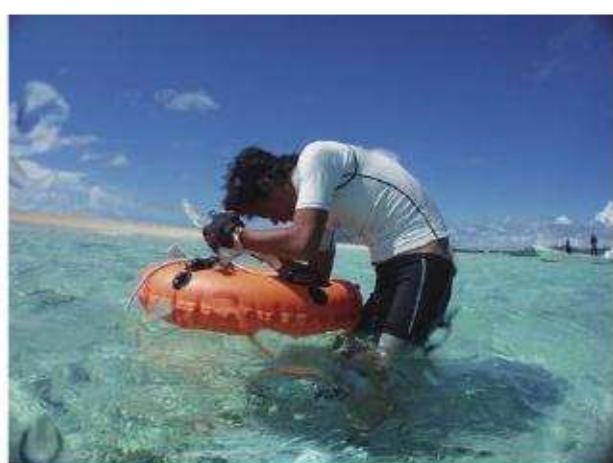
▲海底に散布する 15世紀頃の中国産陶磁器
(東奥武島沖海底遺跡)



▲ハテノ浜とナカノ浜海底遺跡・東奥武島沖海底遺跡(オーハ島) (久米島町、写真撮影：山本祐司)



▲GPSに記録された遺物散布状況 (東奥武島～ナカノ浜)
座標値を地図にプロットする事でようやく遺跡の範囲等がわかります。



▲GPSで遺物の位置を記録する様子 (ナカノ浜海底遺跡)
詳細な地図のない海底では自分のいる正確な場所も
わからないため、GPSで記録する事が必須。

第3章 異国船の時代



琉球王国末期、南西諸島海域には異国船と呼ばれる西欧船の姿が絶えず見られました。西欧列強によるアジア進出の波が琉球王国にまでその影響を及ぼしていたことを示しています。ペリー艦隊が日本の浦賀に入港する前、那覇港に入港し、琉球王国と接触していたことは有名です。

その中には、意図して琉球王国に現れた船も、意図せざる理由で現れた船もあり、座礁・沈没を余儀なくされた船も多数あります。沖縄では、これらの異国船の実態を示す沈没船遺跡が多く確認されています。1797年に宮古島市八重干瀬で沈没したイギリス船プロビデンス号があります。続いて1840年に北谷町北谷沖で沈没したイギリス東インド会社の船インディアン・オーク号があります。近年、琉球王国末期の様子を描いて話題となった小説『テンペスト』に登場する異国船漂着事件のモデルとなりました。ペリーの来琉で知られる1853年には宮古島市吉野海岸沖でイギリス船が、1857年には多良間村高田海岸沖でオランダ船ファン・ボッセ号が沈没しています。1872年には、国頭村宜名真沖でイギリス船ベナレスが、1876年にうるま市南浮原島沖で国籍不明の異国船が沈没しています。これらの海底には沈没した異国船の残骸や積荷が今も残されています。

このような異国船の沈没船遺跡からは西欧船の残骸や、西欧人の持ち物等、琉球に運ばれるはずでは無かったヨーロッパ製品、銃の弾丸等、陸上の遺跡からは発見される事がほとんどない貴重な遺物が発見され、未知の世界の興味を駆り立てます。



▲北谷町安良波公園で遊具として蘇っているインディアン・オーク号

1840年、この海の沖合でイギリス船インディアン・オーク号が座礁・沈没しました。



▲1797年に八重干瀬で沈没したイギリス船プロビデンス号の船体の部品（宮古島市、八重干瀬海底遺跡群第1地点）



◀1857年に多良間島高田海岸の沖合で座礁・沈没したオランダ船ファン・ボッセ号の残骸と考えられる鉄製の箱とその周辺で実施した金属探査。砂の中に埋まっている船の残骸を探しました。



▲海底に散布するファン・ボッセ号の積荷（高田海岸沖海底遺跡）



▲1853年に宮古島市吉野海岸沖で座礁・沈没したイギリス船が積載していた巨大な花崗岩製の方形石材。海底にはおびただしい量の石材が散布していました。
(吉野海岸沖海底遺跡)



▲木造帆船の外底に貼られていた銅板
(吉野海岸沖海底遺跡)

この銅板の発見によって、この船が西欧船である事を裏付ける事ができます。



▲1972年に国頭村宜名真沖で座礁・沈没したイギリス船ベナレス号の滑車
(宜名真沖海底遺跡、写真撮影：山本祐司)



▲完全な形で残されていたヨーロッパワイン瓶の撮影風景
(宜名真沖海底遺跡、写真撮影：山本祐司)



▲海底に散布するスナイドル銃の弾丸
(南浮原島沖海底遺跡)
1876年にうるま市南浮島沖で座礁・沈没した異国船の積荷

第4章 王国内の海域ネットワーク

琉球王国も後半になると、マーラン船と呼ばれる船が王国内の島々へ様々な物資を運ぶ役割を担っていました。その内、どれほどの船が海難事故に遭遇した事でしょうか。正保国絵図には琉球王国内の港とその航路、停泊できる船の大きさと数などが記載されています。海底には、船そのものや積荷が遺跡として残されていますが、その海域は頻繁に利用された航路や危険な暗礁海域と多く重なる事がわかつてきました。

宮古島北方の暗礁である八重干瀬では2ヶ所（第2地点、第3地点）、八重山諸島を巡る航路として重要だった石西礁湖では3ヶ所（第1～3地点）、避難港として利用された石垣島の名蔵湾では1ヶ所（屋良部沖海底遺跡）で沈没船等の海難事故遺跡が確認されています。

これまでに水中遺跡から確認された船の積荷は、主に那覇市壺屋で生産された多種多様な焼物ですが、まれに中国清朝の陶磁器が含まれています。この事はこの水中遺跡が、壺屋で生産された焼物を沖縄島周辺離島や宮古、八重山諸島へ船によって運搬する過程で、船そのものが沈没したか、積荷の投棄によって形成された遺跡である事を示しています。同時に、中国製品も中国船ではなく、琉球王国の船によって運ばれていた可能性もある事を明らかにしました。



▲正保国絵図に描かれた暗礁海域 八重干瀬
(沖縄県教育委員会 1992 より転載)

風向きによってか、東回りと西回りの航路があったようです。八重干瀬では少なくとも、すでに3ヶ所で海難事故遺跡が確認されています。



▲海底に散乱する沖縄産陶器（八重干瀬海底遺跡第3地点）

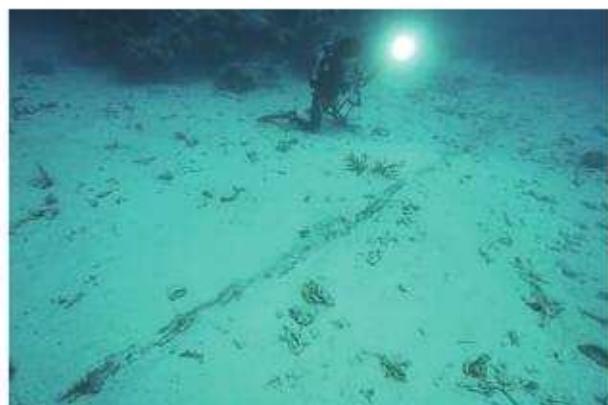


▲八重干瀬海底遺跡群第3地点（宮古島市）
エメラルドグリーンに見える浅瀬で船が座礁したと考えられます。



▲石西礁湖 (提供：株式会社パスコ)

石西礁湖は八重山諸島の島々を結ぶ船の重要な航路でしたが、同時に暗礁だらけの危険な海域でもあったようで、少なくとも4ヶ所で海難事故遺跡が確認されています。



▲木造船体の一部 (石西礁湖海底遺跡群第3地点、写真撮影：山本祐司)

水深約17mの海底で沈没船遺跡が確認されています。



▲海底に散布する船の積荷である沖縄産陶器

(石西礁湖海底遺跡群第3地点)

沖縄島の壺屋で生産された陶器が石垣を経由して竹富島を越え、八重山諸島の何処かに向かう途中で座礁・沈没しと考えられます。



▲海底に散布する沖縄産陶器 (石西礁湖海底遺跡群第1地点)

第3地点と同様、沖縄島の壺屋で生産された陶器が石垣を経由して、八重山諸島の何処かに向かう途中で海難事故に遭遇した船の積荷と考えられます。



◀壺屋焼に混ざって中国清朝の陶磁器も確認されました。

(石西礁湖海底遺跡群第1地点)

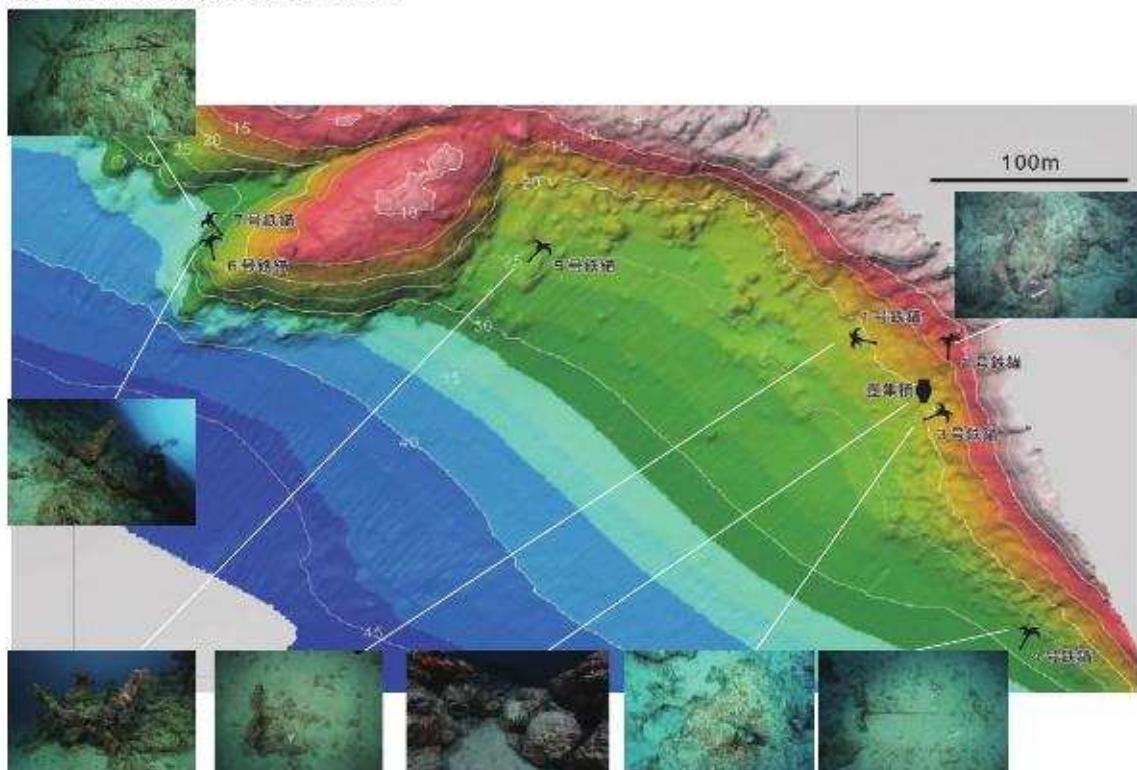


■ 屋良部沖海底遺跡

屋良部沖海底遺跡は石垣島名蔵湾の北方海域で確認された港湾遺跡と沈没船遺跡の複合遺跡です。水深約25mの海底には完全な形をとどめた多くの壺屋焼の壺が密集しており、周辺からは木造の船体の一部と船釘が確認されていることから、沈没船と考えて良さそうです。また、その周囲の海域からは四爪鉄錨と呼ばれる船のイカリが7本確認されています。すべてが沈没船遺跡が装備していたものとは考えられない事から、この海域に停泊していた別の帆船が装備しており、海底に投棄されたものと考えられます。イカリの存在はその海域が港として利用されていた可能性が高いことを示します。

近年、東海大学海洋学部海洋文明学科を中心とした研究グループによって詳細な調査研究が継続的に行われています(Ono et al., 2016)。その成果として、文献記録ではこの海域が船の避難港として利用されていた事、実際に中国から帰国する進貢船がこの海域で沈没していたこと等が明らかになり、遺跡の状況を裏付ける事ができました。ただし、海底で確認された沈没船がこの進貢船にあたるかなどは不明で、今後の課題となります。

さらに、この水中遺跡では地元ダイビングショップと共に保存・活用する試みも行われており、海には潜れない人が船の上で水中ロボットを利用して遺跡の見学をするなど、ダイビングだけではない見学方法も実験されています。



▲マルチビーム測深で明らかとなった屋良部沖海底遺跡の地形

(提供:九州大学 浅海底フロンティア研究センター 菜 浩伸 写真撮影:山本祐司)

透明度の高い沖縄の海といえども、広大な海域を見通して地形を把握する事はできません。それがマルチビーム測深によって可能となり、この海底地形が港湾としてとても優れている事が明らかとなったのです。また、文献に記されていた錨の綱も擦り切れるという「隱干瀬」の存在も明らかとなり、そこから、文献どおりに2つの四爪鉄錨が確認された事は驚きました。



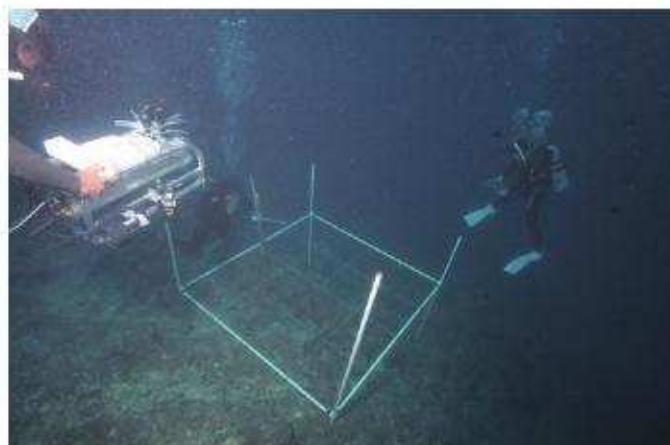
▲第5号四爪鉄錨

四爪鉄錨は江戸時代の和船に多数装備されていた事は良く知られていますが、沖縄で確認されたのはこの遺跡が初めてでした。これによって琉球船も四爪鉄錨を装備していた可能性が高い事がわかりました。しかし、このような大型の鉄製品をいったいどこから入手していたのか、謎が深まります。



▲密集する壺屋焼の壺

数多くが完全な形で保存されており、船に積載された状態にかなり近いと考えられます。



▲第6号四爪鉄錨の実測風景（写真撮影：山本祐司）

海底でも陸上のように「枠」を設置し、正確な図面を作成する事が可能です。画面左上に見えるものは水中ロボット「ケイちゃん」。船上からケイちゃんを操作し、搭載されたカメラを通して調査風景を記録しています。



▲船釘（船体の一部）

この船釘が確認された事から、壺の密集は海上から投棄されたものではなく、沈没船そのものである可能性が高い事がわかりました。

海難事故が起こっていたこと		港として利用していたこと	
一六八五年 古文書に記された屋良部崎	→ 屋良部崎で沈没船	一七七二年 屋良部崎でイカリを下ろし、風を待つ。 → 屋良部崎でイカリを下ろし、風を待つ。	有之候、依之我々見分之上相考申候へハ、崎枝之内 屋良部崎与申浦有之候、其海中より諸船往還之路ニ 候處、隱干瀬有之、夜入候へ者右干瀬を恐、其辺ニ 船懸留など仕候得共、夜中之事ニ而綱旋共摺切、教 我（怪我）候茂多々有之候、右之崎枝江役人籠居 軽我（怪我）候茂多々有之候、右之崎枝江役人籠居 屋良部崎には隱干瀬があり、イカリ網も擦切れる。 ↓危険な暗礁海域
康熙二十三年甲子十一月二十一日為八重山島在番 處同七月十六日返帆之小唐船破於八重山島之内屋良 部崎冲因即日赴彼地方至同二十七日漂來之荷物取揚 行つた。→沈没船	田親雲上朝重正謹大夫鄭永安東恩納親雲上赴于中華 之時為小唐船大筆者叙黃冠同年十二月七日那覇開船 入閩已事竣翌年帰帆之時不得順風漂到于八重山島同 七月聞彼淺於洋中逢逆風同十六日於八重山島屋良部 崎破坐船溺死年時年三十一号邦彦	同三十七年壬辰新街注文持船島邊奉給使令二月廿日石垣泊出帆屋良部 津鏡（傍）南洋御往文拜為念馬艦到島是同廿九日乘帰	同支氏大宗真方家譜 同三十七年壬辰新街注文持船島邊奉給使令二月廿日石垣泊出帆屋良部 津鏡（傍）南洋御往文拜為念馬艦到島是同廿九日乘帰
一六八五年 古文書に記された屋良部崎	→ 屋良部崎で沈没船	一七七二年 屋良部崎でイカリを下ろし、風を待つ。 → 屋良部崎でイカリを下ろし、風を待つ。	有之候、依之我々見分之上相考申候へハ、崎枝之内 屋良部崎与申浦有之候、其海中より諸船往還之路ニ 候處、隱干瀬有之、夜入候へ者右干瀬を恐、其辺ニ 船懸留など仕候得共、夜中之事ニ而綱旋共摺切、教 我（怪我）候茂多々有之候、右之崎枝江役人籠居 軽我（怪我）候茂多々有之候、右之崎枝江役人籠居 屋良部崎には隱干瀬があり、イカリ網も擦切れる。 ↓危険な暗礁海域
康熙二十三年甲子十一月二十一日為八重山島在番 處同七月十六日返帆之小唐船破於八重山島之内屋良 部崎冲因即日赴彼地方至同二十七日漂來之荷物取揚 行つた。→沈没船	田親雲上朝重正謹大夫鄭永安東恩納親雲上赴于中華 之時為小唐船大筆者叙黃冠同年十二月七日那覇開船 入閩已事竣翌年帰帆之時不得順風漂到于八重山島同 七月聞彼淺於洋中逢逆風同十六日於八重山島屋良部 崎破坐船溺死年時年三十一号邦彦	同三十七年壬辰新街注文持船島邊奉給使令二月廿日石垣泊出帆屋良部 津鏡（傍）南洋御往文拜為念馬艦到島是同廿九日乘帰	同支氏大宗真方家譜 同三十七年壬辰新街注文持船島邊奉給使令二月廿日石垣泊出帆屋良部 津鏡（傍）南洋御往文拜為念馬艦到島是同廿九日乘帰

古文書に記された屋良部崎

第5章 米駆逐艦エモンズ



エモンズは、第二次世界大戦の沖縄戦で使用された艦船（軍艦）です。排水量 2,050 トン、全長 106.2 m の船体には、5 インチ砲や魚雷発射管の他、多数の対空機関砲を装備していました。この船が沖縄本島北部の古宇利島沖合水深約 40m の海底に、現在もその姿をとどめたまま沈んでいます。1945 年 4 月 6 日、日本軍の菊 1 号作戦によって多数の特攻機が九州から沖縄へと出撃し、米軍へ攻撃を行いました。エモンズはこの特攻によって損傷し、航行不能となった事から、翌 7 日に味方の軍艦によって沈められました。この戦闘で乗員 60 名が戦死し、77 名が負傷したと伝えられています。

近年、九州大学・先導的学術研究拠点・浅海底フロンティア研究センターを中心とした研究グループによって調査研究が進められています。その成果として、衛星測位システムが利用できない水中において、多視点ステレオ写真測量にマルチビーム音響測深から得られた位置情報を与える新たな方法を提示し、きわめて詳細な海底地形図および三次元モデルが作成されました。水深 40 m の海底で 120m × 30m もの広い範囲について、地理座標を持つ水中多視点ステレオ写真測量の結果を示したのは世界で初めてと発表されました (Kan et al., 2018、九州大学 2018)。

現在、エモンズは上級者向けのダイビングスポットとしても有名ですが、同時に戦争の実態を伝える貴重な戦争遺跡であり、沖縄戦を戦った兵士達の墓標でもあります。今後、この貴重な遺跡を保存し、平和教育への活用を図っていく必要があるでしょう。



◀USS Emmons Photography (NH 107417)
(courtesy of the Naval History and Heritage Command)



エモンズの第 1 砲塔と第 2 砲塔 ▶
(写真撮影：山本祐司)

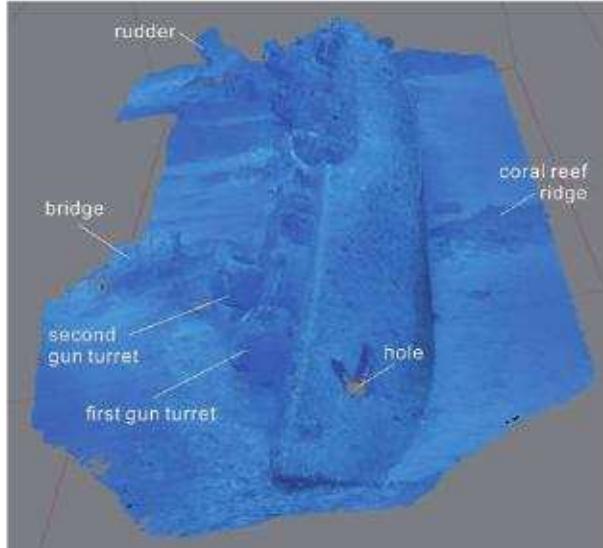
2 つの砲塔はいずれもほとんど水平を向いていることから、特攻機が上空からではなく海面から水平に攻撃してきた事が推測されます。



▲海底に横たわるエモンズ (写真撮影: 山本祐司)

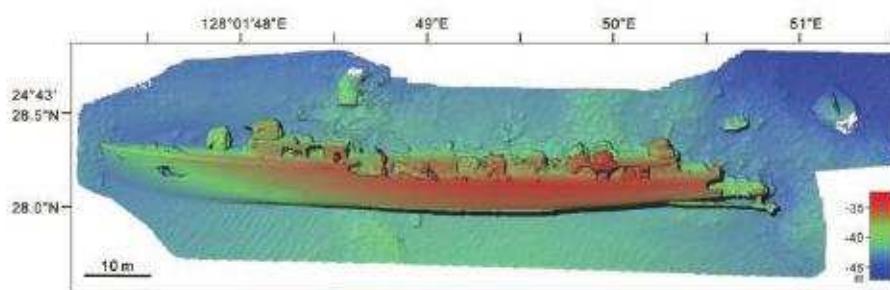


▲エモンズ付近で確認されている特攻機のエンジン
(写真撮影: 山本祐司)



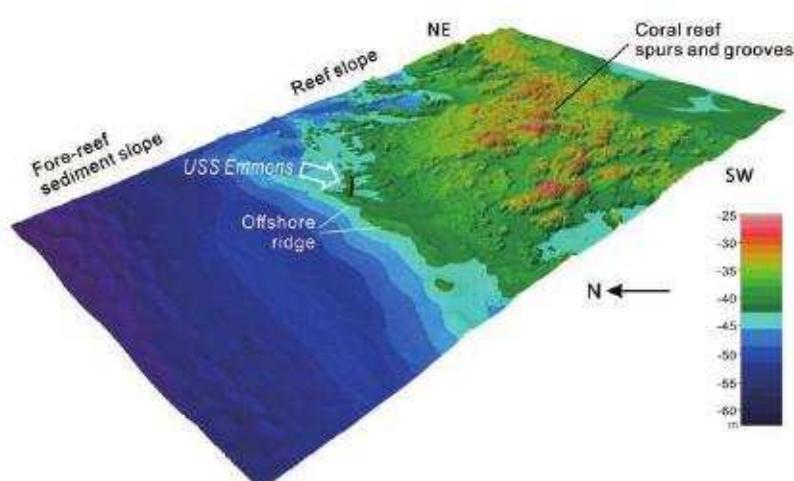
◀多視点ステレオ写真測量にマルチビーム音響測深から得られた位置情報を与えて作成されたエモンズの現状

(提供: 九州大学 浅海底フロンティア研究センター 菅 浩伸)



◀マルチビーム測深で明らかとなったエモンズの全容と破損状況
(提供: 九州大学 浅海底フロンティア研究センター 菅 浩伸)

船尾と艦橋部分は船体から離れて崩壊している。



◀マルチビーム測深で明らかとなったエモンズとその周辺の海底地形
(提供: 九州大学 浅海底フロンティア研究センター 菅 浩伸)

エモンズは水深約40m、過去のリーフエッジに引っ掛かるように留まっている事がわかります。もう少し先で沈んでいたらより深い海底へ引きずられていたかもしれません。

第6章 潮間帯遺跡

水中遺跡は港湾遺跡や海難事故遺跡だけはありません。もともと陸上で営まれていた集落等の遺跡が、^{ちかく}地殻変動や海面変動によって今は水没してしまった遺跡もあります。海岸や海底には、土器や石器等の生活に関する遺物が散布する海域があります。

恩納村に所在する潮間帯遺跡には南恩納地区の屋嘉田干潟と呼ばれる内湾一帯と瀬良垣地区のギナン原海岸に潮間帯遺跡があります。

南恩納北勢高海岸遺物散布地では、先史時代の土器や石器、グスク時代や琉球王国時代の中国産陶磁器、沖縄産陶器など他時期多様な遺物が確認されています。これらは海域によって主体を占める遺物の種類や年代が違うため集落遺跡そのものが海底の土砂の中に埋没している可能性があります。

瀬良垣ギナン原遺跡は、干潮時には干上がり、先史時代の土器、中国産陶磁器、カムィヤキ、沖縄産陶器などの時期幅の広い遺物が確認することができます。



▲南恩納北勢高海岸遺物散布地（提供：恩納村教育委員会）



▲南恩納北勢高海岸遺物散布地に散布する石斧
(提供：恩納村教育委員会)



▲瀬良垣ギナン原遺跡（提供：恩納村教育委員会）



▲瀬良垣ギナン原遺跡の海岸に固着した土器
(提供：恩納村教育委員会)

第7章 生産遺跡

潮間帯の海岸では石切場跡や魚垣跡、塩田跡の生産遺跡が確認されます。いずれも海や潮の満ち引きを利用する目的があるため、海岸で営まれたものです。今帰仁村湧川の塩田跡や久米島北原の巨大な石切場跡、宮古島市下地島や小浜島南岸ビルマ崎の保存状態良好な魚垣跡等が県内各地の海岸で確認されます。

石切場跡はその性質から良く保存されていますが、小石を積み上げて構築された塩田跡や魚垣跡は現在となっては保存状況が良くないものが多いようです。もともとこのような遺構は常に管理をしなくてはならないもので、使用されなくなると自然の営力によって崩壊していく宿命にあります。過去には多くの塩田や魚垣があったようですが、現在はほとんど見ることがない事がその事実を裏付けています。崩壊していく生産遺跡をどのように保存して活用を進めていくか検討が必要と考えられます。



▲湧川ヤガンナ島の塩田跡（今帰仁村）



▲ビルマ崎の魚垣跡（竹富町小浜島）



▲北原の石切場跡（久米島町）



▲真栄田の石切場跡（恩納村）



おわりに～水中遺跡の保存・活用方法を模索する～

沖縄県では、2003年から約10年の歳月をかけて水中遺跡の分布調査が継続的に行われた結果、遺跡の位置や数、種類等の概要が把握できるようになりました。核となったのは2004年～2010年まで沖縄県教育委員会が文化庁国庫補助を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した分布調査です。また、その前後にも、沖縄県内考古学研究者有志（宮城ほか2004、2005）、NPO法人アジア水中考古学研究所（南西諸島水中文化遺産研究所ほか2013）による学術的な分布調査も行われています。今後は、これらの調査成果を基に、沖縄県内における水中遺跡の保護・活用を検討していく段階と言えましょう。

現在、日本各地（例えば、長崎県の前方湾海底遺跡や奄美大島の倉木崎海底遺跡）で様々な水中遺跡の見学等の実験的な保存活用が行われています。また、沖縄県内では、久米島町などにおいて研究機関と教育委員会が連携して、水中遺跡の見学ツアーなどを行っております（片桐ほか2012）。

これらの見学実験等をもとに、沖縄ならではの水中遺跡の保護・活用システムが次のように提案されています。沖縄の海は青く透き通っており、多様な海洋生物が彩り、スキューバダイビング等のマリンスポーツが盛んであり、貴重な観光資源でもあります。つまり、水中遺跡を一番身近に接するのは、これらのマリンスポーツの愛好者であり、その保護・活用には彼らが重要な役割を担うことになるとされています（中西ほか2017）。

このような水中遺跡を巡る現状の中で、文化庁は『水中遺跡保護の在り方について』という報告書をまとめており、陸上に比べて遅れている水中遺跡保護については将来的に海外との新たな交流や観光振興にも大きく期待できるとして、諸外国の状況を考慮しながら、継続的に取り組んでいく方向性を示しています（文化庁2017）。

沖縄県においては、その最大の魅力でもある海に沈んでいる水中遺跡について、その多様で個性的な実態をわかりやすく明らかにしていくことは重要です。そこで、当センターでも、水中遺跡保護への機運が高まっている状況を生かして、より積極的な調査・保存・活用の取り組みを行っていきたいと考えております。



▲ガラスボートでの見学風景
(久米島 東奥武島海底遺跡、写真撮影：渡辺芳郎)

ガラスボートで見学できる水中遺跡もあります。



▲シュノーケルでの見学風景
(久米島 東奥武島海底遺跡、写真撮影：山本祐司)

海底に散布する中国産陶磁器をシュノーケルで見学しています。遺物の位置がわかりやすいように目印を設置。初めての人でもできる方法で実施しています。



▲水中ロボット、ケイちゃん。船上ではパソコンの画面を通して水中の様子を見学しています。操作は簡単、ゲームと一緒に！（写真撮影：山本祐司）



▲水中ロボットを利用した見学風景

（石垣島 屋良部沖海底遺跡、写真撮影：山本祐司）

ガラスボートでは見ることができない水深が深い水中遺跡は、水中ロボットを自分で操作して見学する事もできます。



▲スクーバダイビングでの見学風景（石垣島 屋良部沖海底遺跡、写真撮影：山本祐司）

水深20mに沈む四爪鉄錨を地元ダイビングショップのガイドの案内で見学することができます。石垣島でダイビングを考えている人はぜひトライを！



▲マルチビーム測深で製作された高精度海底地形図を見ながら遺跡を探検する

（石垣島 屋良部沖海底遺跡、写真撮影：山本祐司）

ガイドに案内してもらわなくとも、高精度海底地形図を見ながら遺跡を探検することができる日がくるかも。



▲潮間帯の水中遺跡は潮が引いた時に見学が可能。海底に散布する先史時代の土器や石器を見ることがあります。

【主な展示資料】



(座間味村 阿護の浦海底遺跡)



(久米島町 真謝港海底遺跡)



(宮古島市 八重干瀬海底
遺跡群第1地点)



(竹富町西表島 祖納マエドマリ
海岸沖海底遺跡)



(久米島町 ナカノ浜海底遺跡)



(多良間村 高田海岸沖海底遺跡)



(久米島町 東奥武島海底遺跡)



(石垣市 名蔵シタダル遺跡)



(宮古島市 吉野海岸沖海底遺跡)



(宮古島市 来間島沖海底遺跡)



(国頭村 宜名真沖海底遺跡)



(宮古島市 八重干瀬海底遺跡
第2地点)



(北谷町 インディアン・オーク号) (うるま市 南浮原島沖海底遺跡)



(宮古島市 八重干瀬海底遺跡
第3地点)



(竹富町 石西礁湖海底遺跡群第1地点)



(竹富町 石西礁湖海底遺跡群第3地点)

〈引用・参考文献〉

- 沖縄県立博物館・美術館 2015『水中文化遺産～海に沈んだ歴史のカケラ～』図録
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『沖縄県の水中遺跡・沿岸遺跡－沿岸地域遺跡分布調査報告－』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第87集
- 南西諸島水中文化遺産研究会 2014『沖縄の水中文化遺産－青い海に沈んだ歴史のカケラ－』
- 片桐千亜紀 2010「水中文化遺産の調査事例」『沖縄考古学会2010年度 研究発表会資料集
《テーマ考古学はどのように遺跡を掘るのか—考古学の調査手法とその成果—》』沖縄考古学会
- 沖縄県教育委員会 1992『琉球国絵図史料第一集—正保国絵図及び関連資料—』
- 中西裕見子・片桐千亜紀・菅浩伸・坂上憲一・小野林太郎・島袋綾野 2018
「沖縄海域における海底遺跡ミュージアム構想の実現に向けた屋良部沖海底遺跡での実践」『南島考古』第37号
沖縄考古学会
- 九州大学 2018「沖縄北西沖に沈む戦艦エモンズを高精度で可視化－沖縄戦と特攻の歴史を伝える」
- 片桐千亜紀・山田浩久・崎原恒寿・中島徹也・宮城弘樹・渡辺芳郎 2012
「久米島の水中文化遺産見学会報告～海底遺跡ミュージアム構想の実践～」『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要』
第5号 沖縄県立博物館・美術館
- 南西諸島水中文化遺産研究所・鹿児島大学法文学部物質文化論研究室(編) 2013
『水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進 海の文化遺産総合調査報告書－南西諸島編－』
- アジア水中考古学研究所
- 宮城弘樹・片桐千亜紀・新垣力・比嘉尚輝 2004
「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査－海洋探査遺物からみた海上交通－」『紀要 沖縄埋文研究』2
沖縄県立埋蔵文化財センター
- 宮城弘樹・片桐千亜紀・比嘉尚輝・崎原恒寿 2005
「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査(Ⅱ)－海洋探査遺物からみた海上交通－」『紀要 沖縄埋文研究』3
沖縄県立埋蔵文化財センター
- 恩納村教育委員会 2012「恩納村内遺跡詳細分布調査報告書－村内遺跡発掘調査等(管内調査)報告書－」
PRESS RELEASE 資料 (2018/06/22)
- Ono, R., Katagiri, C., Kan, H., Nagao, M., Nakanishi, Y., Yamamoto, Y., Takemura, F. and Sakagami, N., 2016. Discovery of iron grapnel anchors in early modern Ryukyu and management of underwater cultural heritages in Okinawa, Japan. IJNA 45, 75–91.
- Kan, H., Katagiri, C., Nakanishi, Y., Yoshizaki, S., Nagao, M., Ono, R., 2018. Assessment and Significance of a World War II battle site : recording the USS Emmons using a High-Resolution DEMcombining Multibeam Bathymetry and SFM Photogrammetry. The International Journal of Nautical Archaeology.
- Chiaki Katagiri, Yumiko Nakanishi, Rintaro Ono, and Hiroki Miyagi (2017) Basic Studies on the Western Shipwrecks Discovered in the Ryukyu Archipelago and Their Influence on Modern Society. Proceedings of the 3rd Asia-Pacific Regional Conference on Underwater Cultural Heritage.

関連文化講座

◆第74回 10月28日(日) 13:30~16:30

「沖縄県における水中遺跡の調査研究と保存活用」

講師：片桐 千亜紀（当センター主任専門員）

「沖縄県の水中遺跡」

新垣 力（当センター主任専門員）

「陶磁器からみた沖縄県の水中遺跡」

中西 裕見子（大阪府教育庁文化財保護課 総括主査）

「沖縄での水中遺跡公園の設置をめざして」

◆第75回 11月17日(土) 13:30~15:30

「琉球列島で沈没した異国船の調査と研究」

講師：片桐 千亜紀（当センター主任専門員）

各回予約不要・参加無料（先着140名）

会場：当センター研修室

沖縄県立埋蔵文化財センター TEL: 098-835-8751

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7（琉大附属病院向かい）

交 通：  沖縄自動車道西原 IC より車で10分

 市外線バスター ミナル発・那覇バス 97番、
首里駅発・那覇バス 94番（平日のみ運行）→「琉大附属病院前」下車徒歩3分